

井上靖

蘆 姨捨

姨捨
蘆

井上靖

新潮社版

姨捨・蘆

〈井上靖小説全集11〉



昭和49年11月20日発行
昭和54年5月30日3刷

定価 1100円

© Yasushi Inoue, 1974.
Printed in Japan.

著者 井上 靖

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話・業務部(〇三)二六六一
五一一、編集部(〇三)二六
六一五四一一 郵便番号・一
六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替えいたします。

目次

姨捨

七

蘆

二

花粉

三四

鮎と競馬

四七

父の愛人

六三

風

七三

夜の金魚

七九

錆びた海

八九

二つの秘密

一〇五

合流点

一二五

風のある午後

一四三

湖の中の川

一五六

失われた時間	一六四
湖岸	一七六
俘囚	一八四
ダムの春	一九五
川の話	二〇八
昔の恩人	二三五
夏の雲	二三五
初代権兵衛	二五五
紅白の餅	二七六
梅	二九九
火の燃える海	二九三
*	
利休の死	三〇

桶狭間	三二
信康自刃	三三
森蘭丸	三五
天正十年元旦	三七
篝火	三八
高嶺の花	三九
犬坊狂乱	四〇
佐治与九郎覚書	四一
川村権七逐電	四二
自作解題	四三

裝
函
加
山
又
造

井上靖小説全集 第11卷

姨^{おば}

捨

私が初めて姨捨山の棄老伝説を耳にしたのは一体何時頃のことであつたろうか。私の郷里は伊豆半島の中央部の山村で、幼時私はそこで育ったが、半島西海岸の土肥^{どひ}地方にも、往時老人を山に棄てたという話が語り伝えられており、おそらくはその話と一緒に、姨捨山の伝説は私の耳にはいり、私の小さい心を悲しみでふくらませたようである。

私はその時五つか六つくらいではなかったかと思う。その話を聞いて縁側へ出ると、私は声を上げて泣き出した。その場所が何処であつたか記憶していない。ただうろ覚えに覚えていることは、祖母だったか母だったか、とにかく家人が急に私が泣き出したことを訝^{いぶ}って、縁側へ飛び出して来て、何か二言三言言葉をかけてくれたことである。私には勿論物語そのものは理解できなかったが、母を背負つ

て、その母を山へ棄てに行くという事柄の悲しみだけが抽象化されて、岩の間から滴^たり落ちる水滴のように、それが私の心に沁^しみ入って来たのである。私は自分が、母と別れなければならぬという悲しみに耐えかねて泣き叫んだのである。

姨捨山の説話をはつきりと一つの筋を持った物語として受け取ったのは、十か十一の時のことである。当時十里程離れている小都市に住んでいた叔母から、時々絵本を送って貰ったが、その一冊に『おばすて山』というのがあった。

姨捨山の棄老伝説というものは、少しずつ細部が變つて何種類か流布^{りゅうぷ}されているらしいが、私が知っているそれは、全くこの絵本に依つたもので、それをなんら修正することなしに今日まで持ち続けている。絵本『おばすて山』が少年の私の心にかくに強烈な印象をもつて捺^な印^{いん}されたかが窺^{うかが}える。私が幼時聞いた物語の中で現在に到るものもお忘れないていけるものは、高野山に父を訪ねて行つた石童丸の物語とこの姨捨山の物語である。共に親と子の愛別離苦をその主題としている。

後年大学時代、私は夏の休暇に帰省し、偶然土蔵の戸棚の中からこの絵本『おばすて山』を発見し、改めてこれに眼を通したことがある。最初の一頁の挿絵だけが着色され、他の頁にはそれぞれ凸版の挿絵がついていて、子供には幾

らか難しすぎると思われる文体で、姨捨山の説話が書かれてあった。

昔信濃の国に老人嫌いな国主があつて、国中に布告して、老人が七十歳になると尽くこれを山に棄てさせた。ある月明の夜、一人の百姓の若者が母を背負つて山に登つて行つた。母が七十歳になつたので棄てなければならなかつたのである。しかし、若者はどうしても母親を棄てるに忍びず、再び家に連れ戻り、人眼に付かないように床下に穴を掘つて、そこに置まつた。この頃国主の許に隣国から使者が来て難題を持ちかけた。三つの問題を示し、これを解かなければ国を攻め亡ぼすというのである。その三つの問題というのは、灰で縄を縛うこと、九曲の玉に糸を通すこと、自然に太鼓を鳴らすことというのである。国主は困つて国中に触れを出してこの難題を解く智者を求めた。若者は床下に匿まつている母親にそれを話すと、母親は即座にそれを解く方法を教えてくれた。若者はすぐ国主のもとに申し出て、ために国の難を救うことができた。国主は若者の口から、それが老母の智慧であることを知り、老人の尊ぶべきを悟つてさっそく棄老の掟を廃するに到つたという。

——こういった物語である。最初の着色してある頁には、烏帽子のような頭巾をかぶつた若者が老いた母親を背負つて深山を分け登つて行くところが描かれてあつた。母親は

頭髮だけは白かつたが、その顔はひどく若々しく、それが少し異様に感じられた。満月の光は木も草も土も辺り一面を青く染め、二人の人物の影はインキでも流したようにくつきりと黒く地上に捺されてあつた。粗雑な低俗な絵ではあつたが、しかし、物語のその場面の持つ悲しみは、やはり、この場合も、絵柄の表面から吹き出していて、子供の心には充分刺戟的であらうと思われた。

ずっと歳月が飛んで、大学を出て新聞社へはいつた初め頃、私は『姨捨山新考』という書物を手に入れて、これを読んだことがある。その頃、私はこれといつてまとまつたものを読む根気には欠けていたが、手当り次第、時々気まぐれに雑多な書物に手を出していた。『姨捨山新考』という信濃郷土誌刊行会発行の一卷も、全くのその時の風の吹き廻しで私の書架の一隅に置かれたものであつた。

私は、これを購入した晩、最初の方の極く一部に眼を通して、あとは興味を失つて頁を閉じてしまつた。しかし、この時この本を繙いたお蔭で、私は新聞記者としては何の役にも立ちそうもない姨捨山考証に関する知識の幾らかを自分のものにすることができたのである。

姨捨山の棄老伝説が初めて文献に現われたのは『大和物語』で、それは印度伝来の棄老説話と全く同工異曲であり、

おそらく仏教の伝来とともに、この話も日本に伝わったものではないかということ。しかし、それは別にして太古にはわが国にも棄老の故実はあったに違いないということ。

そして諸国に老人を棄てる説話は語り継がれていたが、それが信濃の姨捨山一つにまとめられ、他は全部消滅してしまったこと。そうしたことには恐らく姨捨が観月の名所として有名になったことが与って力あったであろうということ。それからまた姨捨山そのものが、古代、中世、近代に依って、その対象を異にし、古代は小長谷山、中世は冠着山、近代になって初めていまの篠井線姨捨駅附近が、いわゆる姨捨山として登場して来たということ。こうしたことを、私はこの『姨捨山新考』の著者の労作に依って知ったのである。

それから更に数年経って、私はこの書物を全く異なった目的のために読んでみたことがある。この書物には史上に著われた歌人や俳人の姨捨山観月の作品が殆どあまざす収められてあったが、私は同じ更科の舞台で、同じ観月の歌を、著名な歌人や俳人たちがいかに取り扱っているかという点に興味を持ったのである。見方に依れば多少意地悪くないこともない関心の持ち方であった。

俳句は『姨捨とはす草』とか『水薦刈』とか幾つかの姨捨作品集より抜萃されてあり、芭蕉、蕪村、一茶等々を初

めとする多くの俳人たちの作品が集められてあった。和歌は各時代の歌集から姨捨に主題されたものだけが抜き出され、貫之、西行、実朝、定家、宣長等の名も散見された。

しかし、私が夥しい和歌や俳句の中で最も深い感銘を覚えたのは、『大和物語』の中へ出て来る、母を姨捨山に棄てて家へ帰って来た若者が、母の居る姨捨山の山の端にかかる月を見て詠んだという「我こころなぐさめかねつさらしなや姨捨山にてる月を見て」という歌であった。これは物語の中の人物の詠草であり、歌そのものの巧拙は別にして、単なる観月の歌ではなく、その背後に一つの劇が仕組まれてあるものであった。

勿論、純粹な和歌の鑑賞からは問題はあろうが、いかなる姨捨観月の作品より、私にはこの物語の中の人物の詠んだ歌が切なく心に沁みた。幼時心に刻みつけられた説話の主題が、ここでは歌の形を通して私に迫って来るのであった。

私は実際には長いこと篠井線の姨捨駅も、その附近も知らなかった。この地方に旅行することはあったが、いつも夜にぶつかることが多く、昼間の場合は気が付かないうちに姨捨駅を通過して、姨捨山という土地には縁がないままに過ぎていた。

その後、姨捨の棄老伝説が私の頭に蘇って来る機縁を作

ってくれたのは母であつた。

母は何かの拍子にふと、

「姨捨山って月の名所だというから、老人はそこへ棄てられても、案外悦んでいたかも知れませんよ。今でも老人が捨てられるというお触れがあるなら、私は悦んで出掛けて行きますよ。一人で住めるだけでもいい。それに棄てられたと思えば、諦めもいいしね」

そう言ったことがある。母は七十歳だった。母の言葉はそれを聞く家人の耳には一様に皮肉に響いた。その座には私の弟妹たちも居たが、みなはっとして衝かれたような表情を取った。戦後の何かと物の足らぬ時でもあり、家族制度への一般の考え方もヒステリックな変り方を見せている時で、老人夫婦と若い者たちとの間に起る小悶着は、私の家庭でも決して例外ではなかったが、しかし表だってこれと言って母親に家庭脱出を考えさせるような何の問題もあるわけではなかった。おそらく母は、自分が姨捨の説話の世界では、丁度山に棄てられる七十歳になっていることに気付き、生来の自尊心の強さと負けん気から、その説話にと言うより、それに何か似通つて来ている戦後の時代の雰囲気というものに瞬間挑戦する気になったのではないかと思われた。

子供の絵本に描かれてあつた老婆のように、母親は髪を

そ白いが、艶々した肌と、数一つない若々しい顔を持っていた。私は暫く言葉もなく、その母の顔を見守っていた。生来老人嫌いの母であつたが、今や彼女自身年齢から言えられつきとした老人であつた。私は、自分の老齢を意識し、それに反抗しようとした、そんな母が哀れに思われた。

信濃の姨捨というところが、私に妙に気になり出したのはそれからのことである。

私はその頃から仕事の関係で旅行する機会が多くなり、信濃方面にも年に何回となく出掛けるようになったが、中央線を利用する時は、丘陵の中腹にある姨捨という小駅を通過する度に、そこから一望のもとに見降せる善光寺平や、その平原を蛇の腹のような冷たい光を見せながらその名の如く曲りくねって流れている千曲川を、他の場所の風景のように無心には眺めることができなかった。また信越線に依る時は、列車が逆に中央線から眺め渡した低い平原の一部を走るので、戸倉附近になると、窓越しに、僅かに屋根の赤さでその存在を示している姨捨駅を向い合っている丘陵の斜面に探し出し、その附近一帯を、あの辺りが姨捨なのかといった一種の感懷をもって、眺め渡すのが常であつた。

勿論、私は観月の場所としての姨捨には殆ど関心らしい関心は持っていなかった。信濃の清澄な空気を透して、千

曲川、犀川を包含した、万頃一碧の広野に照り渡る月の眺めはなるほど壯観ではあらうと思つたが、戦時中満洲の荒涼たる原野に照る月を眺めた私には、姨捨の月がそれに勝るものであらうとは思われなかつた。

私が姨捨附近を通過する時、例外なく私を襲つて来る感慨は、必ずその中に老いた母が坐っていた。ある時私は姨捨駅を通過する時、自分が母を背負い、その附近をさまよい歩いている情景を眼に浮べた。

勿論時代は太古である。丘陵の中腹から裾に点在している現在の人家の茂りは見られず、荒涼たる原野が広がっている。しかも夜で月光が絵本『おぼすて山』の挿絵のように辺り一面に青く降り、私と母の影だけが黒い。

「一体、わたしをどこへ棄てようというの？」

と、母は言う。七十を過ぎて体全体が小さくなり、その体重は心細いほど軽いが、私はともかく一人の人間を背負つて方々歩き廻つた果てなのでひどく疲れている。一足歩く度に足許がふらつく。

「ここにしますか。この辺に小さい小屋を建てたら――？」

私が言うのと、

「厭、こんな場所！」

母の声は若い。体は弱っているが、気持は確りしていて、

生れ付きの妥協のなさ、自分が棄てられるこのような場合にも、いささかの衰えを見せていない。

「崖の傍では、雨の時山崩れでもしたら危ないじゃありませんか！ もっと気の利いたところはないものかしら」

「それがいいんです。大体、お母さんの望みは贅沢ですよ。やはり、先刻見た寺の離れを借りることにしたらどうですか」

「おお、いや、厭！」

母は背中、わが儘な子供のように手足をばたつかせる。「あそこは夏には蠟蚊が多いと思うの。それに建物も古いし、部屋も暗くて陰気じゃありませんか。他人のことだと思つて、不親切ね、貴方は」

私は途方に暮れてしまう。

「それなら、やはりいっそのこと家へ戻りましょう。こんなところに住むより、家へ帰つて、みんな一緒に賑やかに暮した方がどんなにいいか判らない」

「また、そんなことを言い出して！ 折角家を出て来た以上、わたしは、家へだけはどんなことがあつても帰りません。またみんなと一緒になんでもまっぴらですよ。家の者も厭、村の人も厭、もうわたしは老い先短いんだから、気のすむように一人で気随氣儘に住まわせておくれ」

「わが儘ですよ、お母さんは！」

「わが儘ですとも。わが儘は生れ付きだから仕方ありませんよ。それにしても、わたしの顔さえ見れば、貴方はわが儘だ、わが儘だと言う。棄てられるというのに何がわが儘です」

「困ったな！」

「いくら困ったって、わたしは家へなんか帰らないから。早く棄てておくれ」

「棄てたくても、適当な場所が見当らないじゃないですか」

「見当らないのは探し方が悪いからです。一人の母のために、棄てる場所ぐらい探してくれたって罰は当りますまい」

「先刻から足を棒にして探しているじゃありませんか。私がふらふらしていることは知っていますでしょう。一体、どのくらい歩いたと思います。当ってみた家だけでも十軒はありますよ」

「でも、わたしにはどこも氣に入らないんですもの。大体、住めそうな家が一軒でもありましたか」

「だから家を借りるのは諦めて、氣に入る場所を探し、そこへ私が小屋を建ててあげようと言っているでしょう。それを、どこへ行っても文句ばかり言って」

「文句だって言いますよ、老人ですもの。——ああ、ほん

とに何処か一人きりで静かに住める場所はないものかしら。もっと親身になって探しておくれよ。——ああ、腰が痛いわ。もっと軽くふんわりと背負っておくれ。おお、寒くなつた。月の光がちくちくと肌を刺すような氣がする」

「暴れないで静かにして下さいよ。私も疲れているんです。お母さんは背負われているからいいが、私の方は背負っているんですからね。お願いです。やはり、家へ帰ることにして下さい。みんなもどんなに安心するでしょう」

「厭！」

またしてもびしゃりと母は言う。

「厭でも知りません。こんなところを一晚中うろついていられますか。本当に私は帰りますよ」

すると、母は急に打って変つた弱々しい声を張り上げる。「堪忍しておくれ。それだけは堪忍しておくれ。どうか家へだけは連れ戻さないでおくれ。もうなんにも言いません。どんなところでも結構です。棄てておくれ。わが儘は言いません。あそこに小屋が見える。あそこでもいい。あそこへ棄てておくれ」

「あの小屋は先刻見た時隙間風が冷たいとおっしゃったじゃありませんか。それに雨漏りもする！」

「どうせ氣には入らないが、でも、仕方がない。もう辛抱します。一軒家だから、その点は静かにのんびりと住める

でしょう」

「だが、あそこはやはりひどいですよ。子供として母親をあそこには棄てられませんか」

「ひどくても構わない。さ、早く、あそこへ棄てて行っておくれ」

そう母は言う。こんどはそこに佇んでいる私の体に、月光が刺すように痛く沁み込んで来る。

——私の眼に浮かんで来たのは、こうした私と母との一幕である。私と私の背に負われている母との会話は自然にすらすると私の脳裡に流れ出て来たものである。母はわが儘であるが、その表情には真剣なものがある。棄てておくれ、棄てておくれと言っている母のせがみ方には、ある実感が滲み出ている。

私はわれに返ると、空想の中の母に、いかにも自然に母らしい性格が滲み出ていることが可笑しかった。姉捨を舞台とした私の空想的一幕物は、例の棄老説話の持つ主題とはかなり遠く隔たっていた。私の場合は母自らが棄てられることを望んでいるからである。棄てられたいと言ひ張って諾かないのである。私はそんな背の母を持て余して、姉捨の丘陵地帯をさまよい歩いているのであった。しかし、その可笑しさとは別に、自分の心のどこかに氷の小さい固塊のようなものが置かれてあるのを私は感じた。可笑しさ

が消えると、それに代って、冷んやりした思いが次第に心の全面に拡がって来そうであった。

私は自分が棄てられたいとせがんでいる母を想像したことが厭であった。寧ろ自分が母を棄てようとしている場面を想像する方が、まだしも気はらくであるかも知れなかった。

それにしても、私はどうしてそんな母を想像したのであろうか。私は長い間そのことを考えていた。そして私は私の背の上に、母に代って自分を置いてみた。私が老人になったら、今空想した母のように或いは自分になるかも知れないと思った。

この夏私は九州の北部の、遠賀川に治った炭坑町へ講演に出掛けて行き、その町の旅館で二年ぶりで妹の清子に会った。

清子は私の四人兄妹の末の妹である。戦時中結婚して二児を儲けたが、事情があつて、夫と子供を置いて婚家を飛び出し、一時実家である私の両親の許に帰っていたが、こんどは、自活するということを理由にそこを飛び出していった。

私は小さい時から兄妹中でこの妹が一番好きだったが、妹の勝手な行動には許せないものを感じていた。絶交とか

絶縁とかそんな表立ったものは何もなかったが、清子の方も持前の敏感さで私の気持を察しているらしく、家を出てからは私のところへは一本の手紙も寄越さなかった。私の方も清子が北九州で働いているということ以外何も知らなかった。

しかし、私は九州へ旅行すると決った時、妹に会って来ようと思った。そして東京を発つ前に、母から住所を聞いて、電報で会いたい旨を連絡して置いたのである。私は清子が訪ねて来るかも知れないし、来ないかも知れないと思つた。

その夜、講演会場から旅館へ戻ると、部屋の隅の縁近いところに妹は予想していたより明るい顔で、小ざっぱりした身なりをして坐っていた。グレイのスカートを穿き、純白の毛糸のセーターを着、髪は流行のショートカットで、実際の年齢は三十四歳なのに、一見すると二十四、五歳にしか見えなかった。

「とにかく食べるだけは食べていますわ。贅沢はできないけど」

清子は言つた。遠賀川の河口近い海岸の町の飛行場の内部にある美容院が、彼女の現在の職場であつた。そこで清子は二十歳前後の娘たち何人かと、自分が何となく頭株のような恰好で、他国の女たちを客にする仕事に従事してい

るのであつた。

私たちは久しぶりで会つた兄妹としてそれにふさわしい口調で話した。彼女の破鏡についても、その後の行動についても、私は兄としての立場から言うべきことは沢山あつたが、それには一切触れなかった。すべては、今更どうなる問題でもなかった。二人の子供まで残して家を飛び出したくらいだから、彼女には彼女なりの覚悟もあり、考え方もあると思われた。

話題には自然両親や兄姉の事ばかりが選ばれた。

「おふくろは相変わらず嬢捨だよ」

と私は言つた。

嬢捨という言葉は、母が嬢捨に棄てられたいと言つた時以来、時々兄妹の間では使われていた、子供たちには便利な言葉であつた。実際に母が嬢捨に棄てられたいと言つたことはいかにも母らしいことで、その性格のいいところをも、悪いところをもそれは端的に現わしていた。従つて、嬢捨だよという言葉の中には、母の自尊心や気儘や気難しさへの軽い非難と、反対にそれらを肯定する子供たちだけに通ずる母への^{いたづら}気持も含まれていた。

清子は私の言葉で一瞬可笑しさを噛み殺したような表情を取つたが、

「嬢捨と言へば、わたし、母さんはあの時、本当に嬢捨山